

## 日高圭三郎の実父小田切清十郎は海防掛徒目付だった

万延元年遣米使節団で徒目付、文久二年遣欧使節団で勘定方を務めた日高圭三郎は、次男だったため、14歳の時実父小田切清十郎の家から、継嗣を求めている日高家に養子に入り家督を継ぎました。当時、御目見以下の徒目付の地位は家柄として男子全員に与えられるものではなく、長男一名にのみ認められる狭き門の制度であったこと、小田切家・日高家当主が共に徒目付であったことが関係していることと思われます。私は今回、日高圭三郎本人から一代遡って、その実父小田切清十郎について、どんな人物で、徒目付としてどんな役割を果たしていたのかを調べることにしました。これはその報告です。

本レポートは史実を忠実に追う学問的アプローチというよりは、読みほどこいた各種資料から滲み出てくる当時の時代背景を想像するアプローチで書いておりますので、その根拠は？と問われる部分も多いかと存じますが、素人の感想文としてお許しください。

- 目次
- 1 小田切清十郎は数学(=和算)の達人だった
  - 2 時代背景 海防掛の発足と役割の過大化、幕府の戦力ダウン
  - 3 海防掛に任命された小田切清十郎
  - 4 ペリー当初来航時の小田切清十郎の海防掛徒目付としての動き
    - <参考1> 「異国船浦賀表へ渡来ニ付風聞承り候書付」 6月14日付報告書
    - <参考2> 「浦賀奉行所留書」
  - 5 品川台場築造に関わった海防掛徒目付小田切清十郎
    - 1) 人事発令
    - 2) 宿舎
    - 3) 勤務場所
    - 4) 品川台場の特徴と問題点
    - 5) 高松彦三郎の日記に記録された小田切の役割
    - 6) 幕府命令以降の動静に関する記事は未発見
    - <参考3> 高松彦三郎による日記から 主な記事と小田切関連事項
    - <参考4> 水戸藩主、徳川斉昭の観察力と思考力
  - 6 付録
    - 1) エピソード
    - 2) 写真を添付します
      - ① 小田切が算額を奉納した愛宕神社
      - ② 小田切の算額の内容を記載した「古今算鑑」
      - ③ 台場築造の当初宿舎となった高輪東禅寺
      - ④ 高輪船着場と石垣跡
      - ⑤ 各台場と宿舎・元小屋の位置関係
      - ⑥ 第一台場の写真
      - ⑦ 第三台場の現在
    - 3) 紐解いた資料

## 1 小田切清十郎は数学(=和算)の達人だった

小田切清十郎の出自についての資料は現時点で未入手です。あくまで想像ですが、苗字から見て祖先は信濃・甲斐の出ではないかと考えています。徒目付就任時期も不明ですが、若い時の事跡の一つとして「算額の奉納」を挙げておきます。

小田切は和算に優れていたものと見え、師匠の内田五観(恭)が天保3年(1832年)に出版した「古今算鑑」という書物に文政11年(1828年)、東都芝愛宕山(=愛宕神社)に奉納した算額の記事があり、それによると、多角形に内接する楕円に関する問題を自ら課し、平方根を駆使した解法を披露しています。これは幾何学の難問というべきもので、当時の旗本の間では、出世の目的で数学の能力を磨き、難問を解いてはレベルの高さを競い合っていたと言われており、会心の作は、算額にして神社に奉納、掲額する人もいたとのことでした。

個人的にはなかなか素敵な話だと思います。ただ、巨視的に見ると、西欧の数学が実用面を重視し、幅広く知識が共有されることで科学技術の発展に大いに寄与したのに比べ、和算の世界は免許皆伝・門外不出といった他人との識見の共有を拒む、家制度の流れを強く受けており、幕末にかけて実学としての洋学にその主役を明け渡すことになった背景には、数学の美学教養としてのありようが強く影響しているのではないかと想像されます。ま、頭脳を駆使することで基礎能力向上の支えにはなったのかなとは思いますが。

つい先般、私は愛宕神社を訪れ、この算額奉納の経緯や額の行方を尋ねたところ、関東大震災および先の大戦の空襲爆撃により全て以前の資料は焼けてしまったとの回答で、小田切清十郎の算額が愛宕神社として初めて奉納を受けた算額であるとの伝承だけが残っておりました。(写真① 愛宕神社)

さて小田切と日高圭三郎との年齢差については、次男坊の圭三郎が天保5年(1834年)生まれであることを考えると、おそらく享和～文化時代(1800年過ぎ)の生まれで、親子で30歳前後の年齢差ではなかったかと思われます。仮にそうだとすると、算額を奉納した文政11年(1828年)、小田切は24～5歳くらいの若手、本を編纂した師匠の数学者もほぼ同世代の俊英であった訳で、やはり数学頭のピークは二十歳代ということなのでしょう。(写真② 算額に掲載した問題)

## 2 時代背景 海防掛の発足と役割の過大化、幕府の戦力ダウン

海防掛(=海岸防衛御用掛)は、はるか以前の寛政4年(1792年)に臨時組織的に発足しておりましたが、その後、天保14年(1843年)、24歳で老中に就任、弘化2年(1845年)に26歳で老中首座となった阿部正弘により常設化された弘化2年(1845年)から、大老井伊直弼により外国奉行設置と引換えの形で解散命令を受けた安政5年(1858年)の12年間に亘り、江戸近海防衛、蝦夷地(=北海道)防衛と開発、経済改革という幅広い重要課題に取り組む組織として存在しておりました。

この組織は、安政2年(1855年)時点で現在の総理大臣に相当する老中主座の阿部正弘の下、老中・若年寄・大目付・勘定奉行・目付・徒目付を含め33名の幕閣および旗本からなる、いわば内閣官房・防衛省・外務省を一緒にしたようなややトップヘビーな官僚組織だった模様です。この組織の実務家たる旗本クラスは、老中阿部の諮問により様々な課題に対する上申を行い、また評議決定事項を実行する機能を担っておりました。最終決定は幕政顧問の溜詰諸侯及び水戸斉昭の同意を得る必要がありましたが、手間隙のかかる大名を相手にする以前に、企画実行の両面を担う実務家として、少数の旗本クラスの官僚に権限を集中して使う便利さを老中阿部は知っていたと思われ、近年の安倍首相の手法と少し似通っていたのかなとも感じる次第です。

しかし、この体制は情報と権限の集中の必要性に対応したものではありませんでしたが、情報と権限を手元に集中した、それ故に却ってペリー来航後の有事対応遂行体力と、国難に当たったの国策決定と求心力強化に弱点を露呈したのではないかと感じます。

すなわち、老中阿部内閣にとって、①諸外国の侵略への対応が喫緊の課題となっていた、すなわちイギリスのアヘン戦争を通じた中国侵略に端を発し、ロシアによる頻繁な日本沿岸侵略と国境交渉、フランスも虎視眈々と勢力拡大を狙っていた、②そうした中、アメリカが初めて実見する鋼鉄製・高速蒸気船軍艦での江戸湾侵入という直接的軍事恫喝を伴いつつ正面から開国を迫ってきた、③これに対し、膨大な経費と労力を伴うものの、江戸城・江戸海岸防衛=内海台場建設を、日本の

軍事力・生産力を示すための手段と決めた、④ペリーへの外交対応が繁忙を極め、開闢以来の事態に対し、外交政策見直しに向け、諸藩諸大名の意見諮問と集約を行わざるを得なくなった、⑤異国人の傍若無人に対する穏便政策への反発としての攘夷勢力拡大への対応と国内の求心力・権威と治安の維持が必要となった、⑥朝廷との調整対応が必要となった、⑦複数の大震災と富士山小噴火に見舞われた、⑧それらがもたらす財政困難に対する資金調達・通貨管理対応、などなどに文字通り多正面戦略を余儀なくされ、かつ全ての対応に今で言う PDCA に力を割かざるを得なくなったことにより、少数のメンバーによるこの官僚組織は、完璧な人手不足に陥ったのではないかと想像しています。

特に、嘉永6年(1853年)に発令された「品川御台場築立御普請御用掛」任命以降、1年強に亘る台場築造、これは江戸城築造以来の江戸時代第二番目の大工事でしたが、首都防備が喫緊の最重要課題との認識の下、海防掛を務める幕閣と官僚が軒並み直接のプロジェクト遂行責任者として関係しました。このためこれに掛ける精力と時間の割合が過大となり、為政者本来の役割である多方面での戦略立案と執行能力が、一段と手薄になったことも想定されます。

また嘉永6年(1853年)7月の開国要求に対する外交政策につき広く意見具申を諮問、権力を自ら分散化してゆきます。大名に加え、人手と知恵の不足を全国各藩の俊秀で賄おうという施策は、いかにも若手官僚の使い勝手を知らぬ老中阿部らしい方策だとは思いますが、この諮問が誰でも意見を言えるぞ、すなわち表立った反対も可、という理解に繋がり、反対勢力としての攘夷論者に力を与え、全国的な百家争鳴状態に陥った結果、幕府の求心力の喪失を招く大きな転換点となったのも事実だったのではないかと思います。海防掛自体もこの状況の中、安政2年(1855年)に至り大幅な増員が図られていますが、いかにも遅まきだったということでしょうか。

またこの時期、幕府財政に関しては、海岸防衛の主眼としての台場築造、会津・川越・鳥取などの譜代大名や幕府直轄領に課せられた江戸相模武蔵房総の海岸防備が、それぞれ莫大な費用負担をもたらしましたが、幕閣による度重なる台場工事現場見廻り、相模房総の見廻り行列に伴う近郷の村々の費用負担も意外に大きかったとみえ、川越藩・直轄領の船橋・多摩地域の負担に関する憤懣やる方ない様子がそれぞれの市史に記されております。

さらには嘉永6年(1853年)～安政2年(1855年)には大地震が連続的に発生、特に安政2年(1855年)の直下型安政江戸地震は江東の家屋および城周りの大名屋敷を破壊し、幕府・各藩・庶民に経済的・物理的困難をもたらしました。

これらを通読して思うことは、ペリーが来航した嘉永6年(1853年)から安政2年(1855年)の間が、幕府にとって国家ビジョンに基づく中長期的意思決定・財政・軍事的対抗・自然災害を含む危機管理の全てにおいて、その内憂外患への対応能力を徳川幕府250年の総括の形で問われた時期であり、それに効果的・総合的に答えられなかったことが幕末の始まりとなったことを、改めて痛感させられる次第です。

今、仮に我々がこれだけの難局に立たされたら、どんな方策を取るのか取れるのか、非常に悩ましく、当時の阿部内閣のありようをもって幕府を弱めたと軽々に批判することは出来ないと思う次第でもあります。現在の軍事的困難を、国民の1人として国の存立を賭けた課題と捉え、歴史に学びつつ、深いビジョンとスピード感を持って取り組みたいものだと考えます。

### 3 海防掛に任命された小田切清十郎

さて、こうした激動の中で、各種資料に垣間見られる海防掛徒目付小田切清十郎の任務と勤務振りがどうだったのか、今回判明したことを、以下、素人らしく相当程度自由な想像を交えて書いてみたいと思います。

当時、海防掛徒目付に増員任命された乙骨彦四郎により記述された「乙骨文書」の記録によりますと、小田切は嘉永6年(1853年)6月の武相房総海岸見分時、既に海防掛の一員として参加していますが、この時点で小田切の年齢は既に50歳を超えていたものと推測され、相当程度の以前から海防掛に任命されていたことが窺われます。

嘉永6年(1853年)8月、小田切は「品川御台場御普請并大筒鑄立御用」で海防掛から支配向として任命されました。

それまでは海防掛所属の徒目付7名の1人として、老中阿部からの諮問事項をこなす内閣官房的なブレーンの役割を果たしていたものと想像いたしました。どの程度の実力かは不明ながら。ちなみに、この頃任命された幕府の軍事・政務の臨時または長期的な職務担当の中核は、ほとんどブレーン集団としての海防掛出身者で占められておりました。嘉永6年(1853

年)の台場築造プロジェクトの中心メンバーも同様で、これは幕閣の具体策評議にあたり意見具申を行う立場の者を実務の当事者として責任を持たせることで、喫緊の課題である江戸城と江戸の城下の防備をスピーディに実行しようとしたという解釈もあるようですが、老中阿部としては、自らその先頭に立つと同時に、顔を知った信頼出来る部下にこの大仕事を「兼帯」(＝各種任務の兼務)の形で任せたいと考えたことは想像に固くありません。海防掛にはこうした兼帯をこなす人材が集められており、兼帯によって情報共有と意思決定のスピード感が維持され、政策推進面での権限が振るいやすくしたいという期待もあったのでしょう。

ただ、そもそも海防掛の人数が少数であったため、こうした職務に任命された海防掛メンバーは兼帯により、結果として日夜多忙を極め、今で言う持ち帰り仕事や徹夜仕事が多かったという記事も残されています。海防掛の勘定吟味役として台場築造に当たった江川英龍(＝太郎左衛門、葦山代官。大砲・艦船築造・溶鉱炉築造にも積極注力)は安政2年(1855年)1月に、激務による過労のためか55歳で急死しています。ついぞと云っては失礼ですが、老中阿部正弘も安政4年(1857年)、老中在任のまま39歳で若死にするほどで、当時の想像を絶する激務の程が偲ばれます。

その中で小田切は、台場築造に当たり、①江戸城詰、②元小屋(＝台場築造本部)、③第一台場築造の管理責任者、の役割兼帯の形で任命されました。

#### 4 ペリー当初来航時の小田切清十郎の海防掛徒目付としての動き

小田切は台場建設の一責任者として高輪に単身赴任する直前、海防掛徒目付として江戸城に詰めておりましたが、ペリーが浦賀に上陸した1週間後の嘉永6年(1853年)6月10日、命を受けて、江戸から浦賀にかけての海岸警備および市中の様子を視察、旁々ペリー艦隊の動静、一行との応接の模様を聴き取り、持ち帰って報告しています。

当時、幕府から様々な役目の人物が視察調査報告を書いており、より詳細な報告書も多数存在しますが、小田切の日記は、徒目付本来の探索業務っぽく、江戸―浦賀間の状況と、浦賀奉行によるペリー艦隊との応接の模様を、観察と聴取書き取りの形でレポートしていますので、少し紐解いてみましょう。

視察はペリー来航から6日後に、夜から徹夜で巡行、翌日一杯までの強行軍の視察でした。

#### <参考1> 「異国船浦賀表へ渡来ニ付風聞承り候書付」 6月14日付報告書

6月10日

午後8時 高輪 町役人厳しく詰め、往来騎馬繁く、番屋へ役人火事装束にて詰め。(＝具足がボロボロ、緘糸が切れたりのため使い物にならないケースがほとんどだったため、やむなく火事装束でよいと老中からの達しによる。太平が続いたことによる軍備の旧態を示す現象の一つ。)

八ツ山・御殿山界限に諸侯が幕張・提灯張り巡らし、人数を出して海岸を警護。商店は平常通り営業。

6月11日

午前2時 大森 一騎駆けの御使番(＝伝令)より羽田界限の情報入手。

午前6時 生麦 大砲の音あり。毎日神奈川沖にて同時刻の発砲(＝時報)ありと。獵師町 異国船渡来につき会所御用として本牧に獵師船数隻用船の用意ありと。獵師より異国船の外観、船足等聴取。本牧 細川家大砲備えあり。近辺に家中の家来を配置。

午前10時 根岸村 小柴沖に異国船ありと。

正午 小柴山 異国船、帆を上げ東行するのを望見、行先不明。滞船のうち2隻は走り水、他は浦賀。

金沢 海辺に幕張、陣立てあり。前日異人野島に小船で上陸、井戸から水汲み、小麦の小品なる菓子子供に投げ与え。子供が走り寄ると島役人が制止、子供は一斉に笑う。異国人はそれを見て銃を一発威嚇発砲の上船に乗り込み。女子供が再び拾いに行くと異国人が戻る気配を見せたので、一同慌てて逃げた。異国人の人相風態についての見聞を聞く。同地にて浦賀表の状況を取り調べのところ、8日に浦賀奉行より米国

人との問答を行った間接報告あり。

アメリカ人との面談記録内容(=浦賀奉行井戸石見守応接)

米要望 この近辺にて島々を借り、屋敷が出来れば人質として50人を置き、毎年交代し、国産の交易をしたい。

石見守 近年凶作続く折柄、新規の話は將軍家に言上し難い。そのうち豊年になれば折を見て取りなす可能性あり、今回は早々に帰帆されたい。なお今後は長崎表にて話を言い、浦賀への入港は禁止する。

米 承った。ついでには日本勝景のため、出来れば王城の地を遠見したい。

石見守 東都は浅瀬につき大船は通ることが出来ない。

米 小舟にて拝見したい。

石見守 王城の地を上陸したいということか。

米 上陸したいということではなく、海上にて拝見したい。

この他の浦賀奉行からの報告聴き取り事項

上陸人数は480人。上陸の際皆千鳥足。着衣の様子聴き取り。煙草以外に火を用いることなく、煙草は前歯に挟み味わう。久里浜上陸の際、指図は鉄の棒にて行う。下人がハイと返答する言葉は日本と異ならず。だが言語全般(=英語)は通じない。干鯛箱くらいの白木箱2個献上あり、ただし願い書はなし。帰帆の砌には鶏と鶏卵とキセルを欲しいと乞われた。

なお帰府の途中、金沢能見堂にて目付松本・堀部、及び徒目付・小人目付と行き交う。

報告書付記

国は北アメリカ。船4隻に3千人乗組み。船型につき詳述。3本マストの間に石塔形のものあり(=煙突)出港の節、煙沢山吹出し、船が見分けられない程になる。また軒近くに水車様の品あり、帆を揚げずとも船足は速い。

## <参考2> 「浦賀奉行所留書」

浦賀奉行の留書(=メモランダム)には、6月3日の当初応接の折、北アメリカワシントンから国書を持参渡来の旨聴き取りがありますので、小田切レポートはその雑駁さから見て、それ以降の続報の一つ程度の意味合いだったのでしょうか。

ところでこの浦賀奉行メモには、現地での陣立ての模様が詳しく書かれております。それによると、久里浜海岸にて高島流稽古打(=和式の砲撃演習か)を行い、4家から出張陣小屋を立て、与力同心が固めているところに銃剣に玉込めした異国人が参上。当方は砂浜に鉢巻、陣羽織、船備え、旗印を押立てて左右に陣取ったとあります。14隻の伝馬船で300人が上陸、行列し、書簡箱の後ろに楽隊が太鼓と笛を鳴らし立て、銃剣調練を行いながら、当方の間にひたひたと繰り込んで来た。陣小屋140畳に毛氈敷き詰め、上段に奉行2名着座、軍艦が4隻だったので、艦長将官4名用に床几を準備していたところ、案に相違して異人50名が大勢のまま冠を取り黙礼しただけで陣小屋に繰り込んで来た。その後、異人が書簡を渡し色々申し立てる間、双方は僅か2間強を隔てただけの距離で対陣していたが、もし陣小屋にて一大事(=武力衝突)が起きたらどうすべきかと一同肝を冷やしながらの対応であった。各打方(=警護武士)には刀抜き放し、奉行馬前にて討死にと一同覚悟の様子が見え、さらには炎天下で鉢巻のみでの固めはいかにも勇ましいが、その暑さの中で立往生(=立ったまま熱中症で気絶したか)する者も出るなど、実に前代未聞のことが起き只々仰天。しかしその後、懸念した武力衝突は起きず、先方は再び剣による鉄砲指図と300人の足を揃えた行進を見せた後、船に帰っていった、その行進の様は非常に整々たるものだったと、生々しい驚きの様子が描かれています。

小田切の報告にもあるように、当時の各大名による海岸防御体制は、幕張陣屋に旗印、火事装束に槍と刀、火打ち銃と火打ち大筒という旧式な和流武装で、今となつては滑稽に見えるほどの陣立てですが、当時としてはそれが精一杯だったのでしょうか。

アヘン戦争における清国敗北に始まり、幕府には外国による侵略に身構えるべき情報は入っており、そのために海防掛

も常設化されたわけでした。ロシアによる北海道・対馬における侵略・挑発に対しては蝦夷地(=北海道)および対馬の防衛策を講じていたものの、交易や開港の要求には長崎で申し込めと窓口を一本化することで入り口を狭め、江戸幕府とのレポーラインを長くして時間距離を稼ぎ、対応を延引するにとどまり、根本策が打てていなかったのが実情でした。特に、ペリー来航前年の嘉永5年(1852年)、既にオランダ商館長からアメリカ艦船来航の予報があり、そのメンバーや規模を含め危機情報として幕府に警告されていたのに対し、軍艦船隊で江戸湾深く侵入し、首都を直撃する直接的な武力威嚇による砲艦外交に対する有効な手立てが打てていなかったことは、当時の幕府内の情報感度と処理能力のレベルを示すものだったでしょうか。海防掛の名称が示す通り、海防=海岸防御に過ぎず、それも諸藩の武士による上述の旧態依然たる装備に依存するものであって、数十年にわたる世界の軍事力に対するキャッチアップ力の不足が、新技術を導入しての軍備増強に力を注ぐ発想とタイミングを逸し、アメリカを先頭とした砲艦外交に名をなさしめたものという気はします。

その結果が、武力を背景として乗り込んで来た相手国に対して、「兎にも角にも応対を穩便にせよ」という将軍からの上意厳命(=阿部具申に対する裁可によるものか?)による平和(=穩便)外交であり、警備の武士が上陸した異国人の傍若無人の振舞いに切齒扼腕し、刀を抜いて切り掛かりたいところを「穩便対応」の上意には逆らえないと我慢を重ね、数年後の各種条約締結と上陸した異国人の治外法権に基づく増長の振舞いの拡大に、それらに対する反動として攘夷運動が激しくなったのもある意味で必然の流れであったとも思われました。

しかし、尊王攘夷を標榜した薩長による文久3年(1863年)の薩英戦争、文久3年(1863年)～元治元年(1864年)の馬関(=下関)戦争のような武力衝突体験なしに、軍事力強化のレベル感を事前に認識することはなかなか困難だっただろうなとも思いますし、一方で幕閣が穩便に扱わなければ徹底的にやられ、清国同様国自体を乗っ取られるぞと、いう感触を持ったことに不思議はありません。もともと、外国艦隊には江戸を占領しそれを維持するに足る兵站輻重はなく、占領もしくは長期駐留は不可能だったので、穩便に扱われ条約締結に至った経緯は、彼らにとってもラッキーな大成果だったという評価もあるようです。

ペリー来航のひと月後の嘉永6年(1853年)7月、大型船の造船許可が幕府から発令されたことは、海防掛の日記にも記載のとおりで、ここに来て洋式軍艦建造の重要性が遅まきながら公式にされたのが、ほぼ同時に発せられた外交政策の諮問と並ぶ、幕府の重要な政策転換でした。

防御に関する備えの弱さからくる力関係は、取り敢えずことを穩便に済ませ、結論を延引する姿勢につながります。繰り返しますが、これらの歴史は、21世紀の戦乱含みの不安定な時代に住む我々に、危機感の持ち方と、明確な準備目標を計画的にかつ素早く十分に行えという教訓を与えてくれているように思われてなりません。

## 5 品川台場築造に関わった海防掛徒目付小田切清十郎

さて、以下に小田切と仕事を共にした海防掛小人目付高松彦三郎による「内海御台場築立御普請御用中日記」の詳細な記述から小田切の台場築造に関する事跡を追ってみました。

### 1) 人事発令

嘉永6年(1853年)8月30日 内海御台場御普請并江戸掛大筒鑄立御用掛(注1)

嘉永7年(1854年)6月18日 異国船到来時の出張(米露以外=英仏などが対象か)

嘉永7年(1854年)7月18日 御台場普請掛御免(第一～第三台場完成)

(注1)老中主座 阿部正弘 勘定奉行 川路左衛門尉(後に勘定奉行・外国奉行) 勘定吟味役 竹内清太郎(後に遣欧使節正使) 同格 江川英龍(韮山代官兼務) 徒目付 小田切清十郎 同平山謙二郎(後に凶書頭) 益頭 駿次郎(後に遣欧使節普請役) 小人目付 高松彦三郎(日記著者・後に遣欧使節小人目付)

### 2) 宿舎 芝・高輪・品川の15ヶ寺 小田切は徒目付として高輪東禅寺(写真③)、後に元小屋(=本部)、船着き場(=写真④)

に近い法蔵寺に移転 台場後方に位置し現場を一望出来る、潮の流れを利用した船着き場の利便性が良い立地。

### 3) 勤務場所 元小屋の如来寺、江戸城の兼務 単身赴任 折を見て夜「内々」帰宅、また家族の宿舎訪問があった模様

#### 4) 品川台場の特徴と問題点

- ①幕府主導により初の西洋築城法(=上部構造)に基づく築造を実施(=石垣は従来通りの和式城郭の工法)
- ②箱館湾・大坂湾他、全国の海防体制に影響
- ③1年強の突貫工事により主だった台場は竣工、和親条約締結に伴い更なる台場築造は中止

短期間大規模工事の実力を示す視覚効果により、上陸用バツテラが品川沖より奥の浅瀬に進むことを阻止するアナウンスの役割を果たしたという評価は可能。ただし防衛に関する長期戦略の薄さを覆すには至らず、費用対効果を考えると却って幕府の財政基盤(国家予算約5百万両)を揺るがすレベルの負担となったことが想定され、和親条約締結の後、追加工事中止命令を出すなど、阿部自身は台場築造自体にさほどの重きを置いていなかったとの評価もあります。ただ、江戸から見た台場は第一から第三が大型の先鋒に当たり、十字砲火によって異国船の侵入を阻むという効果は想定可能ですし、第四から第十一は小型で後陣に当たり、戦術的にも視覚的にも重要度は格段に下がる存在であったと見えることから、台場築造は成功裡に終えたと評価することは出来そうですね。大砲を1発も撃たなかったことへの批判もあるようですが、後の薩英戦争・下関戦争の危険性を先刻承知で、老中阿部からは將軍の意を汲む形をとって、

- ④土(8万2千坪分)は泉岳寺・高輪・御殿山・八ツ山など近傍から取出し、土出し期間中、高輪から品川宿にかけての東海道を通行止めとし、五反田方面へ迂回させました。石は相模伊豆を中心に、材木は上総武蔵相模などから切出し運搬。これらはそれぞれに元請けとなる業者に入札させ、工事費用78万両は幕府の支出でしたが、うち60万両は大坂(9割が大坂)・兵庫・西宮・堺・江戸市中に上納金を求めて充当しています。この他に大筒鑄造費用などもありました。当時の幕府の総予算は約5百万両、うち軍事費は98万両との記事を見かけましたが、台場築造にうち76%を使った計算になりますね。この割合には驚きますが、いかに幕府が直轄領の商人に経済的に依存していたか、また商人もよくこれに応えたな、とも思います。台場のみならず、機に応じて度々上納金を収めているということは、幕府の経済基盤ここにあり、ということで、商人の懐がいかに豊かだったか、最終的に慶喜將軍が大坂に逗留していたこととの関係も邪推してしまうくらいです。

- ⑤工事の準備期間がほとんどないところで、よくこれだけの設計施工が出来たとそのスピーディな官民の動きには感心。

これについては、参考資料としてみた「東京市史」の幕府決裁文書の中に、土木請負人の名前が幾人も出てきますが、そのうちの平野屋弥市という請負人が、最近読んだ、「我、鉄路を拓かん」(梶よう子著)で、高輪品川界限の海上鉄路工事を見事完成させた主人公と知り、台場築造時のスピード感あふれる設計施工がまさに官ではなく民間事業者の大きな力によっていたこと、東海道本線建設にもその経験が余す所なく生かされていたことを知りました。

一方で、官のオーソリティによるモチベーションアップの効果も大きく、工事現場の度重なる見回りが何故行われていたのかについての疑問が、これは単なるチェックにとどまらず、請負人と連携によるモチベーションアップ施策でもあり、現場の工事の精度とスピードに貢献していたのだ、と知ることができたのは、望外の結果でありました。

全くの余談になりますが、私の父方の祖父は満鉄開業時の後藤総裁の囑託に就任、中村総裁の時期に至るまで中国との交渉役を務めており、また母方の祖父も満鉄の工場長を務め、さらに私の息子が鉄道の線路に関する特許発明をするなど、自分と父を除いて、鉄道には浅からぬ縁があります。鉄道150年の記念すべき年に、台場築造に当たった高祖父までもが間接的にはありますが、鉄道と結びついていたことを知ることが出来たのも個人的には感動的でありました。

#### 5) 高松彦三郎の日記に記録された小田切の役割

- ① 台場築造決定とともに、海防掛から支配向徒目付として江戸城勤務との兼帯で派遣される。
- ② 担当は支配向きとして あ)江戸城(=幕閣)との連絡役・視察時の案内役 い)元小屋(=本部)での計画進捗管理  
う)第一台場(=現場工事)の進捗管理責任者。支配向きは全体の計画管理・監督および総務事項を担当か。  
なお、費用は勘定向き、工事監督は普請向きが担当。
- ③ 工事開始後、元小屋で各種検討・折衝に携わる一方、頻繁に第一台場を中心とする現場見廻りを行い、進捗管理を行なっている。この中で課題が発生し、元小屋での議論がまとまらない場合に小田切が目付との折衝役として登城。

④ 米露以外の諸外国渡来時の折衝対応の必要が出た折には、その地に出張するよう命を受ける。

⑤ 第一～第三台場完成時に到り、帰府命令を受ける。

6) 帰府命令以降の動静に関する記事は未発見

帰府命令時点で50代半ば近くになっていたと思われることから、その後は引退に近い状況になったこともあり得ます。

なお、実子日高圭三郎がその年安政2年(1855年)に20歳で徒目付に抜擢されていることとの関係は不明。

### <参考3 高松彦三郎による日誌から 主な記事と小田切関連事項>

嘉永6年(1853年)6月3日 ペリー来航

6月 5日 品川付近の大名に藩邸警護通達

6月15日 幕閣、江戸湾海岸見分

7月 2日 諸大名宛対外政策諮問

7月23日 品川沖台場築造決定 老中阿部正弘 勘定奉行松平近直・川路聖謨 勘定吟味役竹内清太郎 同格江川英龍

8月19日 目付より台場普請覚書通達 徒目付小人目付の対応決定

8月25日 11基計画で築造開始(=第一・第二・第三より開始)

8月28日 「内海御台場御普請御用掛」発足(写真⑤各台場の位置関係)

9月 3日 台場築造御用開始 元小屋(本部)=如来寺 宿泊 小田切は東禅寺 この日より各職による見分開始

9月 4日 持ち場決定 海防掛御徒目付 小田切清十郎 沓番懸り元小屋并揚場共 江戸城兼勤

9月10日 各台場の「水中埋立仕様帳」「落札望高書付」到着 (民間の土木業者・用船業者に入札している)

9月13日 小田切 宿舎を法蔵寺に転宿

9月14日 土船第一便

9月15日 巖船第一便

9月16日 第一～第三小島出来

9月20日 大船建造御免令

9月22日 高輪棧橋普請

9月24日 元小屋より「普請御用心得」通達

10月19日 土俵使用議論勃発、10月末までの完成、24日の老中見分予定で急を要するが、土俵使用工法の効果と費用について問題あり、議論の末小田切が調整役となって目付に計ることとした。

10月20日 土俵使用議論。後取りやめとなる

10月21日 地杭打込み開始

10月27日 第三埋立完了

11月10日 台場基礎部分の地杭打始め

11月13日 老中若年寄見分

11月20日 老中阿部より台場普請掛へ褒賞金 小田切には7両

12月22日 地杭打切る 元小屋目付より東海道往来通行止め回状

嘉永7年(1854年)1月11日 江川、異国船渡来の注進、江戸大騒ぎとなる

この間、11月以降勘定奉行他、海防掛から数名が外交対応のため派遣されている

1月13日 小田切他計3名へ、異国船渡来御用につき14日登城の旨書状届く

1月16日 日米和親条約締結(=鎖国の終焉)

1月26日 異国船台場付近渡来の折の対応につき通達

1月28日 品川近隣大名出兵下命



- 2月10日 台場接近の異国船がある場合、対応は江川英龍が担当
- 2月19日 第五台場着工
- 3月 6日 徒目付、月一度は「内帰宅」に決定(=この間単身赴任中)
- 3月11日 第五第六台場普請開始
- 3月12日 小田切見廻り
- 3月13日 米軍艦江戸内海(=羽田沖)侵入
- 3月21日 ペリー艦隊江戸湾退帆
- 3月26日 第四第七台場着工
- 4月10日 目付岩瀬、八ツ山御殿山土取場、一番～六番見廻り、小田切付添
- 5月 5日 江戸城より元小屋に台場築造中止命令(=第八以降～第十一迄の追加工事につき)
- 5月12日 小田切第三見廻り
- 5月15日 將軍御成の前触れあり
- 5月18日 將軍家定台場上覧、洲崎にて御目見後、第一台場の上陸、第二第三を見渡し、築立方よしとの評価
- 5月29日 6月15日までに完成の旨書面提出。老中阿部より、英仏との応接迫るため竣工を格別急ぐよう通達  
小田切第一～第三見廻り
- 6月 2日 下田よりペリー艦隊退帆
- 6月 8日 目付岩瀬工事につき御相談の儀あり、小田切付添見廻り
- 6月18日 目付・徒目付他 24名異国船渡来時の出張を命じられる。小田切は米露以外の異国船渡来時の対応担当
- 7月 3日 目付岩瀬見廻り、小田切付添
- 7月 9日 第一第二第三台場完成、(写真⑥) 元小屋より、プロジェクトの中心メンバーすなわち松平、川路、岩瀬、松井、江川、岡田、宮田、田中、徒目付代表小田切、小人目付代表栗島が見廻り。以降1週間に亘り幕閣各位の見分
- 7月13日 勘定奉行本多、目付青木他幕閣の見分あり、小田切を含む主要メンバーが応接
- 7月18日 幕府に増手当申請、今回限りを条件に昇給。徒目付、小人目付宛、老中阿部より西洋式の新工法につき風波による破損可能性あり、その檻には修復するよう求められる(=多分に無条件では昇給させたくないのイメージ強し)
- 7月25日 掛役人配置替え、小田切始め徒目付以下 10名に帰府下命。  
「御台場御普請御場所御用透ニも相成候間、手繰次第帰府可致旨達し」  
「長崎・浦賀・下田其外江異国船到来之節、其地之奉行取扱候ハ勿論之事ニ候得共、応接之都合ニ寄其方共可被遣間兼而其心得可罷在候」  
「諸蛮共渡来之節出張之事 御徒目付 小田切清十郎」
- 7月中 砲台据付け(写真⑦ 第三台場と砲台跡)
- 8月18日 老中砲術船見分
- 8月25日 浜御庭海手砲術船打上覧
- 9月22日 大坂湾にロシア船来航
- 9月29日 海防掛ロシア船対応で多忙につき、元小屋担当割り当て変更
- 10月19日 大森町打場にて勝麟太郎の砲術業前見分

#### <参考4> 水戸藩主、徳川斉昭の観察力と思考力

ところでこの時期、水戸藩主の徳川斉昭が強く主戦論を主張したのは有名ですが、この論陣にはなかなかの内容があり、大船建造許可は彼の上奏文が後押ししていたとも思われますし、斉昭が攘夷と鎖国を別物と認識しているようにも見えます。水戸藩士が跳ね上がってテロ集団となったのは彼の望むところではなく、蟄居引退を命ぜられた後の動きであったようですね。

アメリカを始め各国が日本を侵略しようとしていることに対する対応策について、53歳の徳川斉昭は阿部が7月に諸侯宛諮問する以前、ペリー来航から1週間後に長文の怒りの上奏文を提出しています。

これはなかなか切れ味のよい分析と対応策であり、この徹底した主戦論を採用することの影響の大きさを慮り、折衷的なアイデアはないかと聞いたのが、知恵を必要としていた33歳という若い首相によるこの諮問だったのではないかと、思われるくらいです。若手首相はみんなの意見を聞きたかっただろうな、とのイメージが浮かんでしまいました。

斉昭本人は必ずしも攘夷一般等ではなく、開国の必要性も認識して、福井の松平春嶽にその旨を漏らしているようです。水戸藩の自分の部下が先鋭化し天狗党や井伊直弼暗殺など国内の不安増幅にしか影響しなかったのは、不本意であった模様。要は自分の意見を聞かず、阿部が独断で下田条約を締結しデュープロセスを踏んでいないことに対する憤激がベースにあるように思われます。ただ、阿部は内容面では斉昭の建白をそれなりに咀嚼したのか、

9月に大船建造許可を出したのは斉昭の影響かもしれないと感じます。一方で逆に阿部自身は明確な開国派だったわけではないという記事もあって、彼我の戦力認識の違いプラス意思決定におけるけったくそ問題の絡みが歴史を作る結果となったのではないかと印象を持ちました。

#### 斉昭の上奏文の概要

- 1) アメリカの動きが無体である。
- 2) キリシタン＝侵略の手先であることから宗教戦争となる。
- 3) 日本の貴重な金属と彼らの無価値な品々との交換は否。オランダさえ否なのにもっての外。最初は交易と言っているが魂胆は別、難題を次々言うてくるのが目に見えている。よって和議に反対、抗戦すべし。
- 4) 旗本に槍剣の演習をさせろ。目的は船上での白兵戦に用いる。
- 5) オランダ人に命じ、蒸気船を建造させろ。船大工・部品を取り揃え、大砲・小砲を作らせろ。昔、三韓の職人を連れて来たこともあり、蒸気船の技術も追いつくことで打破可能となる。蒸気船は大名にも作らせろ。それで浦賀に参勤させ、羽田沖にて防戦させれば、幕府の費用少なく、効果大を目指せる。
- 6) 蒸気船を京大坂との米輸送に使えば長期的な利益大。
- 7) 蒸気船の建造はオランダ経由では遅いから、大名に用意させろ。オランダからその材料や寸法は聞いてすでに分かっている。
- 8) 銃砲火薬も諸外国に負けているが、幕府と大名に研究させ、出来る限り数を増やせ。着火での火打ち石式は否。銅の産出が減っており、鉄に移行させろ。一方で銅は供出させろ。諸国に命令して花火を禁制とし、火薬の蓄積に勤めさせろ。
- 9) 海岸防備は水軍として漁師も使え。郷土を隊長にして漁師を軍事訓練せよ。漁師に軍功ある時は報奨金あることを予め言い含めよ。漁師は会場で鍛えた筋力あるものにつき、城作りにも役に立つ。火砲の演習もやらせよ。

## 6 付録

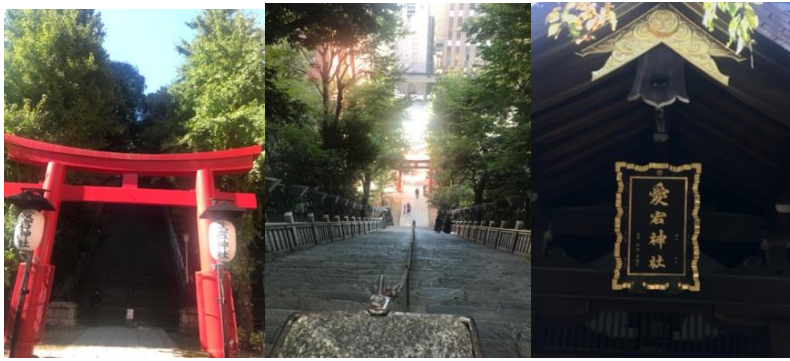
### 1) エピソード

私の母は大連からの帰国子女で、女子学院3年に編入、白金に住んでおりましたが、水泳の場所がお台場だったそうです。昭和の初めには海水浴場として整備されており、水深が比較的すぐに深くなっていたため、遊泳範囲にロープを引き渡し、足元の水中には一面に簧の子を敷いて足が立つようにし、そこで昔の水着を着てチャブチャブ泳いでいたということでした。

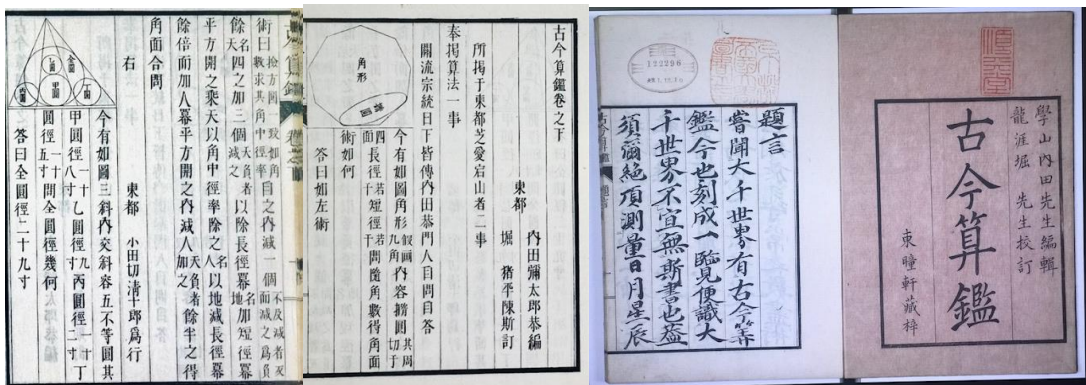
ちなみに同時に父から聞いた、大正時代の父の水泳の場所は月島だったそうです。月島は当時から下水の流れ込む環境で、とてもじゃないが気持ち良く泳げる場所なかったとのことでした。でも泳いでいた。今は昔、ですね。

2) 写真を添付します

① 小田切が算額を奉納した愛宕神社



② 小田切の算額の内容を記載した「古今算鑑」



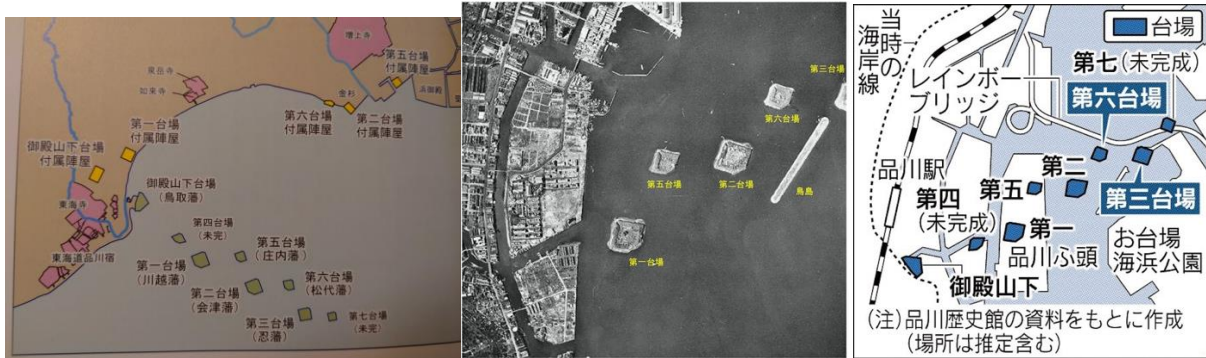
③ 台場築造の当初宿舎となった高輪東禅寺(品川駅高輪口、私の現勤務先と高輪三丁目のご町内です。何かのご縁か)



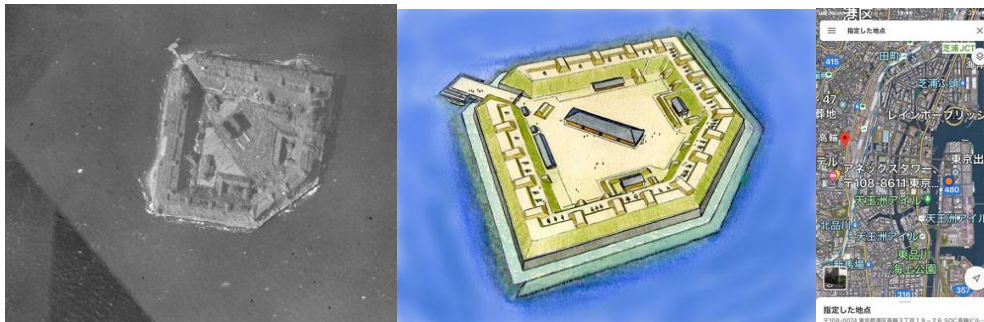
④ 高輪船着場と石垣跡(ここが当時の海岸線 東禅寺から坂道を下った第一京浜に面し、高輪ゲートウェイ駅前にあります。)



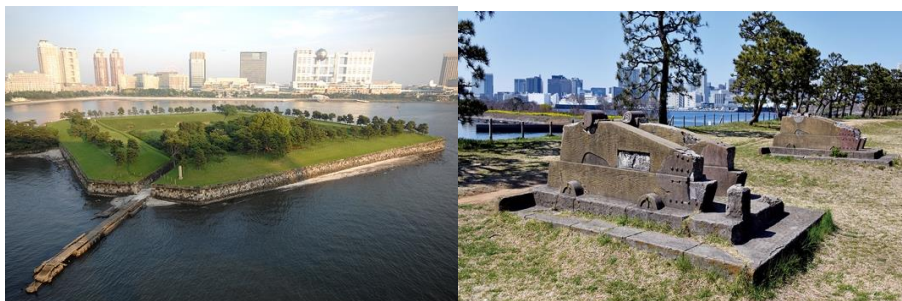
⑤ 各台場と宿舎・元小屋の位置関係(東禅寺→元小屋→高輪船着場→第一台場間はほぼ直列関係。)



⑥ 第一台場の写真(埋め立てられて品川埠頭となり、現在は倉庫会社のヤードとなり跡形もありません。)



⑦ 第三台場の現在 全景と砲台跡 (公園になっていて、地表部分は自由に散策可能)



3) 紐解いた資料 (太字＝主な参考文献)

- 1 **港区史(通史編近世下 幕末・江戸湾防備と内海台場)**
- 2 川越市史(外国船の来航と川越藩の警備他)
- 3 船橋市史(幕藩体制の崩壊と市域の村々)
- 4 未完の多摩共和国(江川担案の業績と多摩人の自立精神)
- 5 日本科学技術史大系(品川台場)
- 6 **東京市史稿(幕府頽勢時代) (幕府内局の記録文書集)**
- 7 **安政期海防掛の制度史的考察(乙骨耐軒文書との関連として) 長尾政憲**
- 8 **内海御台場築立御普請御用日記 高松彦三郎筆 品川歴史館富川武史翻刻**
- 9 日本の鉄道創世記(幕末明治鉄道発達史)
- 10 幕末武家の回想録 柴田宵曲編

- 11 岩波文庫 旧事諮問録上・下
- 12 岩波文庫 幕末百話
- 13 江戸の旗本事典 小川恭一
- 14 古今算鑑 内田恭編
- 15 我、鉄路を拓かん 梶よう子
- 16 他多数

以上